

『西鶴諸国はなし』 咄の創作

——「八畳敷の蓮の葉」の構想と素材——

宮澤 照 恵

一 はじめに

『西鶴諸国はなし』巻三の六「八畳敷の蓮の葉」については、これまで序との重複部分がある点や語り手の問題などが取り上げられたことがある。しかし十分な論議が尽くされたとは思われない。その要因として、素材が十分には解明されていないこと、結末部分の解釈に揺れが見られることなど、根本部分の問題が未解決なままであることが挙げられよう。一方で本話は西鶴の「咄の方法」を考える上で貴重な観点を提供してくれているようにも思われる。そこで本稿では、これまでの諸説を検討しながら西鶴の「咄の方法」に踏み込み、構想と作為に焦点を合わせて、改めて一編を読み解いてみたい。その際、新たな素材の提示を試み、西鶴が咄を創作するうえで核になったものは何かを探りたいと思う。

「八畳敷の蓮の葉」の全文は次の通りである。但し表記を一部改め、便宜上全体を a、b、c、d の四つの部分に分けた。

(一)

a 五月雨のふりつゞき、吉野川もわたり絶て、つねさへ山家は物の淋しやと、むかし西行の住たまひし、こけしみづの跡をむすひ、殊勝なる、道心者のましますが、所の人爰に集りて、せんじ茶に、日を暮しぬるに、

b 雨しきりに、俄にやまも見えぬ折ふし、板縁のかた隅に、ふるき茶碓のありしが、其しん木の穴より、長七寸斗の、細蛇の一筋出て、間もなく花柚の枝に、飛うつりて、のぼると見えしが、雲にかくれて、行方しらず。麓の里より、人大勢かけ付て、只今此庭から、十丈あまりの、竜か天上したと申。此声におどろき、外に出て見るに、門前に大木の、榎の木もありしが、一の枝引き、其下ほれて、池のごとくなりぬ。

c さてもく、大きな事やと、人々のさはぐを、法師うち笑つて、おのく、廣き世界を、見ぬゆへ也。我筑前にありし時、さし荷ひの大蕪菜あり。又雲州の松江川に、横はゞ一尺式寸づゝの鮒あり。近江の長柄山より、九間ある山の芋、ほり出せし事も有。竹が嶋の竹は、其まゝ手桶に切ぬ。熊野に油壺を引蟻あり。松前に、一里半つゞきたる、こんぶあり。つしまの嶋山に、髭一丈のばしたる、老人あり。遠國を見ねば、合点のゆかぬ物ぞかし。

d むかし嵯峨のさくげん和尚の、入唐あそびして後、信長公の、御前にての物語に、りやうじゆせん、御池の蓮葉は、およそ一枚が、式間四方ほどひらきて、此かほる風、心よく、此葉の上に、昼寝して、涼む人あると、語りたまへば、信長笑せ給へば、和尚御つきの間に立たまひ、泪を流し、衣の袖をしほりたまふを見て、只今殿の御笑ひあそばしけるを、口惜くおぼしめされけるかと、尋ね給へば、和尚のたまひしは、信長公天下を、御しりあそばす程の、御心入には、ちいさき事の思はれ、泪を洒すと、のたまひけるとぞ。

以上一読して明らかかなように、本話は「古老から話を聞く」スタイルを取っている（とはいえ、いわゆる

中世説話の枠を随所で越えており、単なる昔語りではない。aにおいて舞台と語り手を紹介した後は咄の場が用意され、bの事件をきつかけにしてその咄の場は増強される。即ちbを挟むことで、単なる茶飲み咄から法談へと咄の内容を変化させる枠組みが施されるわけで、そこから新たにc、dの咄が紡ぎ出されていく。本話はストーリー性指向ではなく、大枠としてプリミティブな咄の形態を維持し、臨場感に留意した咄作りになっているのである。このことを踏まえた上で、以下本書の解析に当たっては、まず次節においてb、dの素材に関わる問題を検討し、次いで第三・四節では、表現や構造上の原理にも目を配りながら西鶴の咄の創作方法——着想から構想への成熟過程——に筆を進めたいと思う。

二 素材をめぐって

(1) 竜の昇天

本書の素材としてこれまで指摘されているのは、bの「竜の昇天」に関する類話である。今、便宜的に『西鶴事典』に従えば、

1 類話に『奇異雑談集』巻五「硯われて龍の子出て天上せし事」がある。(江本氏指摘)

2 『和漢三才図会』巻四五「竜蛇部」に記される「ときものが口碑化したものか」。(富士氏指摘)

となる。富士氏の指摘される『和漢三才図会』の話は、「北浜(琵琶湖)で、尺ほどの小蛇が梢に上がりまた降りて泳ぐことを繰り返すうちに、丈ほどに大きくなったかと思うと、黒雲・夕立を伴い竜が昇天した。その際わずかに尾が見えたのみであったが、大虚に入るや晴天となった」というものである。当時流布していた「湖(池)水の蛇が竜と化し、昇天した」という中国種の話として、一つの典型を示すものと言えよう。

なお『西鶴大矢数』に

世界のほたる影まつて今 西鶴

化して竜のぼる梢は茂あひて 西海

正筆の奇特風があらはす 西濤 (『西鶴大矢数』智の巻・第三十七)

といった付合があるところを見ると、『和漢三才図会』に載るような「竜の昇天」と「梢に上がる」という動きとの結び付きは、西鶴の連想範囲と重なっていると言えよう。

さて、本話が『和漢三才図会』に代表される類話と大きく異なるのは、蛇が「水中」ではなく「茶白の中」から登場する点である。その点で江本氏の指摘された『奇異雑談集』の例は本話により近いと言えよう。この類話についても一瞥しておきたい。

『奇異雑談集』の咄と本話bとの相違点は次の三点である。

項目	『奇異雑談集』下	『西鶴諸国はなし』卷三の六 「八疊敷の蓮の葉」
場所	武蔵金河の禅寺	吉野苔清水の跡の庵
現れ方	硯が割れて二分ほどの虫(竜の子)が出る	茶白の芯木の穴から七寸斗の細蛇が出る
昇天	蓮池に投げ入れられるとそこで瞬時に大きくなり雲に包まれて登る	間もなく花柚の枝に移つて登る

右のような違いが見られるが、全体としては咄の場や大まかな推移等、類似性が極めて高い。即ち、夏の方丈で数人が同席している中、加工された石から虫(蛇)が出て竜の昇天につながる点、(時が経過し)竜が昇天したのに伴い人々が駆け付ける点、あとを見ると石木も池水も乱れていた点等々で、両者には共通の伝承素材を考える余地がありそうである。

「石から竜の子が飛び出して瞬時に成長して昇天する」という奇異譚については、時代が下るが、『雲根志』の「竜石」の項に武蔵・近江・河内・紀州にわたる共通性の高い五つの話が載るので、これにより特徴を押さえておく。

- (1) 「硯・茶臼・石」などの石又は石の加工品から竜が生ずる(全例)
- (2) その「硯・茶臼・石」などが割れたあとを見ると、豆粒ほどの穴があいている(4例)
- (3) 石を入れていた袋にのみ穴が見られるが、竜が抜け出た後、石自体が軽くなる(1例)
- (4) 水滴が自然に漏れ出るといった兆候がある、あるいは水に縁のある石である(4例)

右の他、竜の昇天を第三者や近郷の人々が目撃するといった記述が見られ、大雨や震動、雷鳴を伴い、一天暗くなるなどの描写も見られる。なお、以上の特徴は管見の他の例にもほぼ当てはまり、説教の席などを通じて流布した気配が濃厚である。「八畳敷」のり部分も右の性格から逸脱しないことをひとまず確認しておきたい。

「何れ中国種で、石譜や怪石録の類いに見る「竜石」「竜生石」「魚竜石」などの形状と、竜堆に潜む竜、上昇する竜といった伝承が合体して生まれたものであろう。『奇異雑談集』において咄の末尾に「古老の人のいはく」として「海底の石に童子しぜんにむまれて千年すぎてその石山にあること、千年の後また里にあるこ

と、千年の内にこの石を硯にきる時、童子その中興にあたる」とわざわざ解説を加えているのはこの間の事情を示唆していると思われる。

但し、『古今事文類聚』・『太平御覧』・『淵鑑類函』等の類書には該当する記事は見い出せなかった。察するに右の咄は中国の種々の伝承を元にしてはいるものの、日本において成長・定着したものかと思われる。管見の範囲では写本段階の『奇異雑談集』が文献上確認できる早い例で、その後刊本の流布などを通じて浸透し、定着を見たものと考えられる。仁齋が童生石を見抜き奇石として所持する事に警鐘を鳴らした、という逸話が『雲根志』に見えるが、時期的には『奇異雑談集』に次ぐものであろう。

以上、いわゆる竜の昇天の第一段階に「石から童子が飛び出して瞬時に成長する」という部分が付け加わった奇異談は、類話から推して説教の場などを通じて広まったようであるが、『諸国はなし』執筆の段階で確認できるのは写本の『奇異雑談集』のみである。この時点では未だ十分に定着していない、中国色のかかった珍しい話材として、捉えてよいように思われる。西鶴は竜の昇天咄の一つのバリエーションとして「石から童子が飛び出す」という新しい説話を仕入れ、それに寄り掛かることで挿話を形作っている、というのがb部分に関する私の見解である。

(ロ) 「二間四方の蓮の葉」の意味するもの

次にdの素材を検討する。冒頭でも触れたが、この部分については、結末の策彦が涙をこぼした理由を巡って解釈が分かれている。この対立は本話の根幹に関わるものと思われるが、この問題を検討するに当たって、「二間四方の蓮の葉」及び「この葉の上に昼寝して涼む人」がそれぞれ何に由来するのかという問題は等閑に付されて来たように思われる。しかし一つの解釈に到達するためには、素材の探求を通じて西鶴の表現意図並びに作為を考えることが不可欠であろう。そこで以下では、解釈を論ずるに先立ってdの部分の

咄の素材——八畳敷の蓮の葉の意味するもの——を新たに提示し、西鶴の表現上の工夫を確認しておきたいと思う。

『古文真宝』に「題ニ太乙真人蓮葉図」という韓子蒼の詩が載る。今『諺解大成』により全文を示せば次の通りである。

太乙眞人蓮葉舟、脱巾露髮寒。
颺々、輕風爲帆、浪爲檝、臥看三玉
字、浮中流。

中流蕩漾翠綃舞、穩如龍驤萬
斛舉、不是峯頭一丈花、世間那
得三葉如許、

韓古意、太華峯頭玉井、
蓮開花十丈、藕如船、

龍眠畫手老入神、李白時自號龍眠居士尺素

幻出眞天人、恍然坐我水仙府、

蒼烟萬頃波粼々、

玉堂學士今劉向、禁直峒嶠九

天上、不須對此融心神、會植青

藜夜相訪、劉向校書天祿閣、夜有老父手植青藜杖、扣闥而進、乃吹杖端烟光照見向在暗中

讀書曰我
太乙之精

(傍線筆者)

本話dの「かほる風心よく此葉の上に昼ねして涼む人」という行文の原型となった素材が、右の詩に描かれる太乙(太一とも)蓮舟ではないかと思われる。そうであれば「二間四方」という奇抜な蓮葉の大きさも又、西鶴が無から創り上げたものではないことが了解されよう。太平の世に現れ蓮葉の上に臥して輕風に吹かれるまま波のまにまに身を任す太乙は、楊万里や元好問の詩の材にもなっている。「諺解大成」所載の胡荈溪の注に「李白時畫太乙真人臥一大蓮中一手執書一卷一仰讀蕭然有物外之思、子蒼題詩其上、語意絶妙、眞能詠盡此畫」とあるが、元好問の題画詩「太一蓮舟三首」と併せると中国では古くには蓮葉図が画題と

して定着していたと考えられる。何れにせよ西鶴の太乙及び蓮葉図に関する知識の深淺は不明であるが、「古文真宝」の詩は知っていて、蓮葉のイメージはそれによつたものところでは考えておく。以上素材の裏付けを得た上でdを読めば、「入唐後」の策彦の口から異国の珍しい咄として蓮舟が語られるという設定は、さほど唐突なものではないと思われてくる。

ここで太乙以外の蓮葉のイメージ効果を一瞥しておきたい。「類船集」に「極楽の蓮華は車輪の大きさ」とあるが、二間四方の蓮葉にはそれに一脈通ずるイメージがある。また蓮といえは同じ「古文真宝」に収載される周茂叔の「愛蓮説」が大方の頭に浮かぶであろう（『類船集』の付合に「蓮—周茂叔」とあり、「蓮」の項の説明文中でも愛蓮説に触れている）。この詩を通して蓮は、「悪に染まらず清潔上品で道理に通じる人格者」としての君子のイメージを容易に招き寄せる。

以上述べてきた蓮に関する事柄を総合すると、dの部分は次のように読み取れようか。策彦の咄の中の「りやうじゆせん」には極楽のイメージが重なり、そこに太平の世に現れる太乙真人を具現した、大きな蓮葉の上でくつろぎ涼む人がいる、彼はまた俗世に染まらぬ君子をも連想させるのである。但し素材は太乙真人であつても、西鶴の筆を通して仰臥読書の仙人は「かおる風の中で心地よく昼寝して、涼む」という極めて卑近で人間的なものに変化させられている。更にこの部分はある得ない姿勢に戯画化されて挿絵に描かれることで、視覚的效果を十二分に發揮している。そこには現実離れたウソ咄の気配と共に、論語の「飯疏食飲水」、曲、肱而枕之、樂亦在其中」（述而篇）のパロディかと思わせる遊びの気分が漂っている。（図1参照）

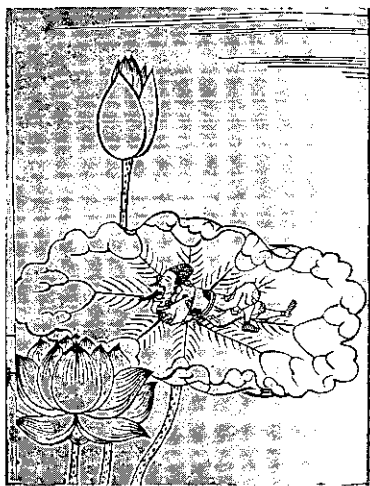


図1 「八畳敷の蓮の葉」挿絵

一方蓮葉の方は西鶴の筆を通して、韓子蒼の詩にある「大河を波や風まかせに漂う蓮舟」のイメージではなく、「りやうじゆせん」の池に浮かぶ、時が停止したような極楽そのものの心地よさをもたらす蓮葉」というイメージに変化している。更に「八畳敷」という大きな形容は、いかにも書院の畳に一人、大の字になって寝転ぶ自由なありさまを思わせる。この辺りの表現には

小商人泊り定めぬ雲の空 松意

四五畳敷の海士の捨舟 江雲

(『虎溪の橋』)

などに通じる手慣れた俳諧の調子が伺えよう。

このようにdの部分では太乙蓮舟にまつわる咄を素材として、いくつかのイメージを重ね合わせ、最終的には中国の雰囲気を残したまま極めて卑近で人間的な味わいへと当世化・俳諧化が施されているのである。又蓮葉が「りやうじゆせん」の池にあるものと限定し、「およそ一枚が二間四方ほどひらきて」と強調することによって、蓮葉の上で涼む人物よりも蓮の葉の大きさの方がクローズアップされるように描かれていることにも注目すべきであろう。既に素材は元の形にあらぬ方向に咀嚼され、ウソ咄の方向に作りなされたのである。

三 話材の連結——着想から構想へ

b、dの素材に関しては前節ではぼ明らかになつたと考える。即ちbとdとは同じ中国種とはいえ出生の異なる、互いに無関係な咄なのである。両者を結び付けているのは、bでは「十丈あまりの竜」の天上とそ

れに伴う現実（榎の木の下が掘れて池のようになった）によつて描かれる大きさへの驚き、dでは「りやうじゆせん」の御池の蓮葉」の大きさへの驚きという共通項であつて、一話の構造としては、cの部分が現実性のある大きなものを列挙することで連結機能を負い、bとdとを繋いでいるのである。

ところで西鶴の咄の中には、思いがけない話材を組み合わせることによつて一編が作られているものがある。言葉足せば一話の中で個々の話材がどの程度独立性を保っているか、その度合いは一樣ではないのであるが、一つの話がいくつかの話材から構成されており、それぞれの話材の取り合わせ方に独自性が顕著に見られるグループである。「八覺敷の蓮の葉」の例で言えば、おそらく西鶴以外の誰も、吉野における竜の昇天と、策彦・信長の蓮葉をめぐる問答とを組み合わせることは無かつた筈である。

このbとdとの組み合わせは、先に述べた「大きさへの驚き」という共通項だけでは到底説明がつかない。つまり、大きさへの驚きを一つのメイン・モチーフに据えたとしても、あるいは龍の昇天咄を章首に使うことを決めたとしても、そこから蓮葉や策彦・信長につながっていく必然性は見えて来ない。あるいは小見出しの「名僧」が本話を読み取る手掛かりであると仮定した場合、書き出しの舞台を吉野と設定することによつて吉野から「西行ゆかりの苔清水の跡をむすぶ道心者」（a部分）を導くまではよいとしても、名僧あまたあつた中で策彦を取り上げるには、やはり何らかの意図あるいは連想上の必然が無ければなるまい。西鶴の頭の中に予めbの竜の昇天というモチーフや、dの策彦・信長の蓮葉をめぐる問答に成長していくモチーフがあつたとしても、それらを結び付ける着想を得て始めて本話が型作られた筈である。何れにしても西鶴のたくらみをキャッチするには、b、dの挿話を繋げる連想上のパイプを探る必要がある。そのパイプこそが、本話の核となつた着想ということになる。

(1) 策彦和尚と八疊敷の蓮の葉とを繋ぐもの

(一一一)

先に第二節(四)において、『入唐後』の策彦の口から異国の珍しい咄として蓮舟が語られるという設定は、さほど唐突なものではないと思われる。と述べた。これはあくまで咄の流れとして自然に受け入れられることができるという意味であり、ここで取り上げようとしている作者の側の連想上の必然あるいは意図(作為)は、それとは別な次元の問題である。大きなものであると同時に珍しいものは、それが異国の咄であればなおさら例示には事欠かない筈である。dで「蓮葉」を持ち出したのには何らかの必然性あるいは意図があると考えられる。

図2は天龍寺妙智院蔵の「謙斎老師帰日域図」である。傘を差し掛けられて人々との別れを惜しんでいるのが、帰国の途にっこうとしている策彦和尚である。この船の図は『和漢船用集』などにも類例が見られず判断に苦しむのであるが、ドーム型の簡便な手漕ぎ舟というところであろうか。この手漕ぎと帆を利用してゐるらしい原始的な舟で日域まで帰つたとは思われないが、印象に残る、異国の見慣れぬ舟である。西鶴が「謙斎老師帰日域図」一幅を実見していたとしたら、この絵から何を連想したであろうか。以下は飽くまで西鶴の連想や見立てを辿ろうとする一つの仮説に過ぎないのであるが、あえて想像をたくましくしてみたい。

四人の水主の手漕ぎによるこの舟は、川舟程度の大きさであろう。中央が盛り上がり白旗(帆にしては幅がなく、固定されていない)が風になびいている。おそらく船室が中にしつらえられ窓があるのであろう、人の姿が見える。策彦が立っているところは、甲板であろうか。この舟を見て俳諧師西鶴が軽く「八疊敷の舟」と表現しても、何の違和感もない。

図3は「仙仏奇踪」に見える龍樹、図4はそれを手本とした宗達の描く龍樹である。二つの絵に共通して描かれる下向きの蓮葉と、図2の舟図に一脉通ずるものがあるのではないか、というのが私の想像の出発点である(なお、寛文十二年版『徒然草』の挿絵(下巻29丁才)にも同趣の蓮葉が見られる。下向きドーム型の

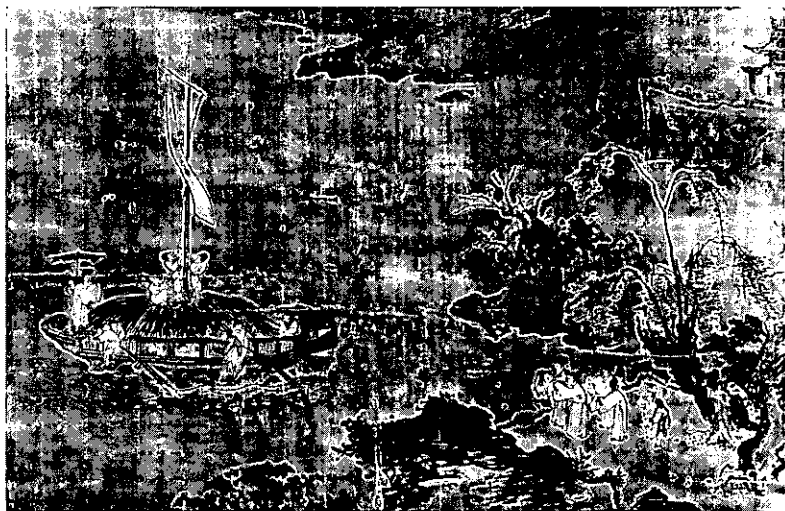


図 2 妙智院藏 謙斎老師帰日域図 「策彦入明記の研究⁽¹⁷⁾」より転載



図 4 俵屋宗達 龍樹図 一幅



図 3 『仙伝奇踪』 龍樹図

図 3・4 『近世日本絵画と画譜・絵手本展⁽¹⁸⁾』より転載

(131)

蓮葉は、図柄として定着していたものと見做せよう。即ち西鶴が妙智院で「謙斎老師帰日域図」を裏見し、その舟を、図柄に見える「水に浮かぶように見える下向きの大きな蓮葉」と見立て、同時に詩に描かれた伝説上の「太乙真人蓮舟図」を想起したのではないかと考えるのである。いささか強引の感もあるが、少くも西鶴にいくばくかは太乙蓮舟図の知識があつたであろうこと、及び「謙斎老師帰日域図」を裏見していたであろうことは、どちらも非常に可能性が高いと断言しても許されよう。私には、この見立てによる遊びを西鶴自ら種明かしすべく戯画化し、本話の挿絵の人物（太乙のパロディ）を不自然な姿勢の中国風の人物に仕立てているように思われてならない。（図1参照）

さて右の想像はそれとして、この他に策彦と蓮葉とをつなぐ西鶴の着想の要素として考えられるものを若干つけ加えておく。先に素材として竜の昇天咄の類話を挙げた際、「奇異雑談集」の記事が最も早いとし、西鶴が同一伝承に拠ったか、或いは同書の写本を見ていた可能性が高いとした。「奇異雑談集」の咄では、竜の子は（梢を伝うのではなく）蓮池に投げ入れられ、そこで瞬時に大きくなる。この例に限らず龍の昇天咄の舞台にしばしば登場する「禪寺」と、「蓮池」とは連想の範囲内にある取り合わせである。又竜と禪寺も関係が深い（次項参照）。そこで改めて「竜―禪寺―蓮池」という連想に立つて見れば、龍の昇天から蓮池が想起されても不思議ではなからう。

また一方で策彦和尚を出発点にして、「天龍寺―蓮池・竜」（寺号・禪宗寺院などからの連想）という連想の糸をたどることも可能である（次項参照）。但し以上二側面の連想だけではbとdとを結びつけるには不十分であり、ましてや「蓮池」から「太乙真人（八畳敷の蓮の葉）」への連想を跡付けるのには無理があるように思われる。又、策彦の乗った舟図からダイレクトに蓮葉図を重ね合わせるのに比して、こうした連想の糸においては咄を生み出す喚起力は弱いように感じられる。

(四) 吉野と策彦和尚とを繋ぐもの——(土地の設定と構想)

本話の舞台設定は吉野である。これはb部分の竜の昇天にふさわしい土地として選び取られたものというのが、これまでの大方の見方である。都藍尼などの土地の伝承や地形、龍を冠する地名群(龍門寺・龍門滝・龍門村・龍在峠等)などからして、吉野が竜の昇天にふさわしい土地であることには、異論を差し挟む余地がない。ただ気にかかるのは、二節(4)で述べたようにbの竜の昇天咄が『奇異雑談集』の類話と非常に近いことである。たとえば『諸国咄』巻二「残る物とて金の鍋」の例のように中国種の話に顕著なのであるが、西鶴は素材にほとんど手を加えないで外枠のみを卑近な形に整える咄の作り方をするところがある。そういう目で見直すと、b部分においては先行する類話との距離が近すぎるだけに、かえってそれとの相違点に西鶴の意図が隠されているようにも思われる。そこで改めて、『奇異雑談集』との大きな相違点である土地の設定に目を向けてみたい。即ち何故本話では『奇異雑談集』の類話にある「武蔵金河の禅寺」等ではなく「吉野苔清水の跡の庵」か、という舞台設定の問題を、西鶴の手の内を探る手掛かりの一つにしたいと思うのである。

今、『類船集』で吉野や吉野山を見ると当然のことながら「唐土、谷、峰の白雲、法師、桑門(ヨステヒト)、金の御獄」など仏者・修行者・唐土・仙境といったイメージの付合が並ぶ。もう一つ吉野について回るイメージとして切り離すことが出来ないのは、改めて言うまでもなく「南朝」の記憶であろう。即ち、同じく『類船集』につけば「御幸・皇居・禁中・内裏・帝・黒木の御所」などの語群がこれにあたる。ここで、天龍寺が南北朝動乱の罪業懺悔を本願として、後醍醐天皇の菩提を弔うために企図されたことに思いを致せば、その塔頭の一つである妙智院三世をつとめた策彦と南朝吉野とのつながりは直ちに浮き彫りになってこよう。

天龍寺の主要行事として後醍醐天皇忌が執り行われている。『策彦入明記の研究』には策彦が六十九歳から七十四歳にかけてほぼ毎年御忌頌、献香の詩、焼香偈を捧げたことが記されているが、牧田氏は、当時策彦が後醍醐天皇の御忌奉修に苦心していた事実を指摘しておられる。ちょうどこの時期は、信長の入京後にあたり、信長と策彦との交流があった時期にピタリと符合している。このように、実は「吉野—天龍寺・策彦—信長」という本話b・dの挿話を結ぶ糸は強固に繋がりが、その背後には後醍醐天皇の存在が張り付いているのである。

以上、西鶴が本話の舞台を吉野に設定した理由は単に土地のイメージというだけではなく、より必然的な理由として、背景に、南朝後醍醐帝と天龍寺策彦和尚との強固な結び付きがあったことが指摘できる。また、後醍醐天皇の霊を弔うため、天龍寺の境内嵐山に吉野から蔵王権現と桜の木を移しているが、これなどは人々の目に触れ語り継がれたという点で、吉野と天龍寺とを直接結び付けている目に見える好例である。このように、天龍寺や後醍醐天皇と密接な繋がりを持つ吉野の土地を選び取った時点で、西鶴の念頭には、既に策彦の咄を結末とする、あるいはメインとする青写真が出来ていたと考えられる。言い換えれば表に現れない後醍醐帝(吉野)と天龍寺(策彦和尚)との繋がりが、本話の構想のもう一つの核となっているのである。

次いで、竜の昇天咄の位置付けを考えておきたい。以下、しばらく天龍寺に目を向けてみる。天龍寺の寺号や伽藍、庭に注目すると、本話bの龍の昇天咄とこの寺との距離が一挙に縮まるように思われる。『太平記』卷二四「天龍寺建立事」には夢窓国師の進言を

去六月廿四日ノ夜夢ニ吉野ノ上皇鳳輦ニ召テ、亀山ノ行宮ニ入御座ト見テ候シガ、幾程無テ仙去候。又其後時々金龍ニ駕シテ、大井河ノ畔ニ逍遙シ御座ス。……哀可然伽藍一所御建立候テ、彼御菩提ヲ吊ヒ進セラレ候ハバ、天下ナドカ静ラデ候ベキ(傍点筆者)

と記す。この寺が天龍と名を変えたのは、足利直義が川から巨大な金龍があがるのを夢に見たためともいう。又夢窓国師の作庭になる曹源池の山際には周知のように「龍門の滝」がある。これらを踏まえると、寺域も

廣大であつた江戸時代の天龍寺から、天に向かつて昇る竜を連想することは容易であつたのではなからうか。⁽²²⁾更に禅宗と竜(竜石)との結びつきが強いことも、bとdの組み合わせを考える上で参考になる(注22参照)。一例を挙げれば、山号「龍」を冠する寺は各宗にわたるが、禅宗寺院においてはその割合が圧倒的に高い。以上竜と天竜寺との結びつきが非常に深いことを考慮すると、西鶴はbの挿話を用意するにあつて、当初から天龍寺を十分に意識していたと思われるのである。

吉野の土地設定を巡って、素材との繋がりや西鶴のたくらみを探ってみた。西鶴の構想の中でbの挿話ほどのように位置付けられるかを再度確認しておけば、西鶴は「龍の昇天咄を大きなものの一つのモチーフとして、dの挿話と並び立てるべく、独立した形で冒頭に示して見せた」というのではなく、「dに帰結していく咄の方向の出発点として吉野を選び取り、天龍寺につながる龍の昇天を第一の挿話としてbの部分に据えた」ということになるうか。bの部分に類話との共通性が高く、作爲があまり感じられない(二節(i)参照)のは、導入部として機能させるために、謎を盛り込み過ぎぬよう配慮したせいではないかと思われる。

四 西鶴の謎掛け——信長の「笑い」と策彦の「涙」

これ迄にも触れたように、d部分の策彦の涙をめぐって解釈が二つに分かれている。一つは「信長の壮大な氣宇に感激しての涙」と捉え、信長に比べて自分の話した蓮葉の咄など小さいとする説で、宗政氏・富士氏がこの立場をとる。もう一つは「天下を領ろうとする武將にしては、信長の心が小さいことを嘆いた涙」と捉える説で、江本氏・井上氏がこの立場である。有働氏は基本的に後者の立場であるが、自分の笑われたことに對して策彦が悔し涙を流すと捉える点が独自である。こうした解釈の揺れが見られるのは、西鶴が両用に取りれる書き方をしていられるせいでもあろう。この部分を解釈する上でキーワードとなるのは、「涙」と「笑い」

と考えられる。以下、本文に即して、この二語を検討したい。

(一八)

まずは「涙」である。「(策彦が)語りたまへば信長笑わせ給へば和尚御つぎの間に立たまひ涙を流し衣の袖をしほりたまふ」と、途中の切れ目のない動きが展開する。西鶴の筆運びに従う限り、策彦の話に対して信長は即座に笑ったのであるし、策彦は座の途中であるにもかかわらず、その笑いを目にするや否や次の間に立ったことになる。相手が自分の話に対して笑ったというだけで策彦はこうした行動を取り、「袖をしぼる」と表現するほど涙を流したわけで、常識的に考えると不自然な反応と言わざるをえない。しかも不審に思ったであろう次の間の人物に問われ、それに対する答えの中でも策彦は「(〇〇の理由で)涙をこぼす」と自ら涙を明示している。

ところで本書はそれぞれが八〇〇〜一二〇〇字程度の完結した咄で、西鶴は其中で一つ一つの言葉に意味を持たせ、決して冗長な言葉運びをしてはいない。本話を見ても、例えば同種の言葉(道心者・法師・和尚など)でも無神経に繰り返すことはせず、それなりの意味を持たせ効果的に言葉を選んでゐる。脇道に逸れるようではあるが、これ迄さほど注意が払われてこなかったように思われるので、章首部分を取り上げて簡単にこの点を確認しておく。

吉野と言えば直ちに満山の桜が思い浮かぶが、本話では「五月雨のころ吉野川のわたり絶え」たという設定で、ここに世間から隔絶された山中の空間がしつらえられる。書き出しは

今日見れば川波高し三吉野の六田の淀の五月雨のころ (新拾遺・夏・義詮、謡曲・胡蝶)

山里は冬ぞ寂しさまさりける人目も草もかれぬとおもへば (古今・冬・宗子)

などの歌を踏まえた表現であろう。周知のように吉野は単なる山奥ではない。「野ざらし紀行」に、「むかしよりこの山に入りて世を忘たる人の、おほくは詩にのがれ、歌にかくる。いでや唐土の廬山といはむもまたむべならずや」とあるように、土地が歴史を記憶しているとも言うべき、高僧や文人とつながる土地柄である。

そこに登場する本話の語り手は、「苔清水」の跡に庵を結ぶ人物として設定されている。一旦は忘れ去られたかに見えた「苔清水」が新たに注目されたころでもあり、吉野で咄を語る人物設定としてはこれ以上の選択はなからう。ここでは西行のイメージを採り入れたうえで当世化し、「見知った人々と五月雨のつれづれに、煎茶を楽しみながら咄の時を過す」という、そのまま付合語に見出されるほどパターン通りの、とはいえない自然な咄の場を準備しているわけである。この部分を導入として配することによって、例えば「奇異雑談集」の類話が「禅寺と寺院内の僧侶たち」という設定であるのに比べて、咄の展開や参加者（聴衆）に自由な広がりや約束することになる。

以上章首を例にとつて一瞥したに過ぎないが、省略こそ多いものの無駄のない効果的な言葉選びがなされていることが確認できたと思う。以下例えばbにおいて花柚と榎の木が見えるが、ここには俳諧的笑いが隠されている。一つ一つの用語を疎かにできないのである。このことに留意すれば、全体の締括りとなる重要な箇所「涙」が二度繰り返され、しかも二度目は策彦自らの口から語らせている点は大いに注目すべきである。

この涙は第三者に見られて恥じ入るといった類いの涙ではなく、ある種「意志的な涙」と捉えるべきなのであろう。策彦は涙したことを、それも第三者から明確に見て取れる程であることを自ら認め、涙の訳を問われて「信長公天下を御しりあそばす程の御心入にはちいさき事の思はれ泪を洒す」と改めて意志をこめて表明しているのである（さもなければここでの言葉尻は「小さきことの思はれける」と結んでもよいはずである）。

もう一つここで考慮すべきは、この涙の主が名僧策彦であったことである。信長の非礼な反応に対して、単純に腹を立てるとか悔し涙を流すという解釈では、策彦が卑小な人物になってしまう。なぜここで意志的な涙が強調されるのであろうか。素直に取れば、信長の氣宇の大きさにそこまで感激したということになるのであろうか。詳しくは「笑い」の意味を検討しなければ結論は出せないのであるが、なにかしら西鶴の謎掛けがここにあるように思える。

飛躍するようだが、西鶴はここで信長と後醍醐帝の氣質に一脈通じるものがあることを念頭においていたのではないかと思われる。同時代の個々の評言は省略するが、気性の激しき、悲劇的結末など、両者を重ね合わせることは当時の人々にとって無理なことではない。両者と最も近い立場にあつた晩年の策彦が後醍醐帝と信長とを重ね合わせて見てしまふ、その心情を外に現れた「涙」という言葉で表している、と捉えるのは穿ちすぎであらうか。もう少し軽口に取るのであれば、西鶴は策彦の涙によって、後醍醐帝と天竜寺との繋がりが本話の構想の核であることを、言いかえれば「後醍醐帝が本話の抜けである」ことのヒントを示している、とも取ることができよう。何れにせよ私には策彦のこの反応に後醍醐帝の影が感じられ、幾分か「悲劇の帝王に対する策彦の意志的涙」が混じっているように思われるのである。

次に「笑い」に注目してみる。信長がどのような笑い方をしたのかは描かれていないのだが、「笑い」の語そのものはbの龍の昇天に驚き騒ぐ人々に対する法師の反応として、cの冒頭で一度用いられている。その場面では、「笑い」によって、法師に比して人々の見聞が狭く世界が小さいという上下優劣の關係が生じ、それを受けて次の段階——法師による知識の披瀝、大きなものの列挙へと咄が展開していくことになる。即ちcでは「笑い」が咄の展開上「梃」の役割を果たしているのである。dの部分の「笑い」を問題とする際には、それがcと同じ構造の繰り返しとして読めるかどうか、一話全体が「笑い」による優劣の発生という構造の重層によって成り立っているのかどうか一つの鍵であらう。

ここで一旦策彦の話の内容を点検しておきたい。前述したように、策彦の語る「蓮葉の上に涼む人」は太乙真人の当世化・俳諧化であると考えられる。ただ、その蓮葉が大河を漂うのではなく「りやうじゆせんの御池」に浮かぶとしておいた(第二節(ロ))。しかし、後醍醐帝・天龍寺・策彦の関係を明らかにした後では、もう少し咄が具体的に見えてくるように思われる。

この場面の笑いをもたらす咄そのものは、異国の伝承である太乙蓮舟図を当世化したものなのであるが、単に信長がそれを笑うだけでは反応自体cの法師と変わりがないことになってしまう。それでは策彦の話の相手が交流の深かった大内でも武田でもなく、天下統一を今一歩まで進めた信長である必然性が見えてこない。cの法師と信長とは、笑いのレベルに違いがあつてしかるべきではないか、その証拠にdはcまでとは違つて終始敬語が使われている。また話を終結させるに足るだけのインパクトのある笑いでなければ、わざわざ大きなものの列挙を締括る結末部分に配する意味はないのではないか。

以上の疑問にたいするヒントは先の「りやうじゆせん」にあると思われる。太乙蓮舟伝承で描かれるのは大河で、場所は特定されないが中国でなければならぬ。それがここでは釈迦説法のある「りやうじゆせん」に置き換えられているわけで、この特殊な地名に西鶴の作為を読み取るべきであろう。結論を言えば、ここは「拈華微笑」をふまえ、迦葉の笑みを信長の反応にとりなした俳諧的発想に基く行文なのである。即ち、策彦の咄に対して信長一人がその深意を解して微笑んだ、それを即座に解した名僧策彦は自らを省みて、あるいは剛毅な気性の勝つた不幸な生涯を終えた後醍醐帝を思つて意志的な涙をこぼした、というのが結末部分の私の解釈である。

このように解するのには文中の「りやうじゆせん」という地名以外にも根拠がある。天龍寺の境内にある嵐山に、吉野行在所から蔵王権現と桜を移して後醍醐帝の霊を弔つたことは、先に述べた。この嵐山は夢窓国師の手になる天龍寺十境の一つに数えられ、霊鷲山になぞらえて「不言開笑拈花嶺」(『太平記』卷二十四

「天龍寺建立事」と称されているのである。禪の教法の根本につながる拈華微笑が、拈花嶺を有する禪宗寺院天龍寺三世策彦和尚のエピソードの中で用いられることには何の不思議もない。

なお右の解釈を裏付けるべく、拈華微笑が一般にも知られていた話であることを、同時代の仏書や仏教説話集以外の文献によって確認しておきたい。『太平記』には「禪ノ立ル所ハ、釈尊大梵王ノ請ヲ受テ、於ニ初利天ニ法ヲ説給ヒシ時、一枝ノ花ヲ拈ジ給ヒシニ、会中比丘衆無ニ知事。爰摩訶迦葉一人破顔微笑シテ、拈花瞬目ノ妙旨ヲ以レ心伝レ心タリ。此事大梵天王問仏決疑經ニ被説タリ」とあり、その故事を紹介している。また『古今夷曲集』巻十・釈教に「拈花をば八万人にしめせども迦葉独りぞ破顔微笑す」とあって、よく知られた話であることが分かる。さらに、『類船集』では「授」の項に「釈門の迦葉拈花微笑し給へり」とあり、「笑」の付合に「悟り」があげられている。

以上、迦葉の破顔微笑を信長の「笑い」に重ね合わせると、禅問答のようなこの咄の結末部分の謎が氷解する。西鶴は太乙真人の蓮葉をパロディ化することでウソ話を作り上げていただけでなく、策彦と信長の問答に禅の公案を匂わせ、「信長公天下をおしりあそばす程のお心入れには小さきことの思はれ涙を流す」と、意図的に「小さきこと」や「涙」が両用に取りれる書き方をしているのである。以心伝心、分かる者には余計な説明は不要というわけで、解釈が分かれるのもむべなるかなというところである。当時の読者はdの部分に禅問答として読み、俳諧を嗜むほどの者は西鶴の作為・謎掛けを楽しんで読み解いたであろう。

本話は最後に蓮葉をめぐるdの挿話を置くことで、ウソ咄になり、同時にナゾ話にもなっているのである。なお素材の拈華微妙に忠実であれば策彦は積尊の立場であり、信長は迦葉の立場ということになるのだが、dの部分のみ突出して敬語に彩られていることから察せられるように、そこは別格であって、信長の笑みを見て策彦は直ちに信長の人間の大きさを悟り、後醍醐帝を思うと同時に自らをも省みて涙するという展開になったのである。ここでも素材を突き抜け権威を茶にする西鶴の自在な創作を見て取ることができよう。

五 おわりに

これまで三節にわたり、新たな素材を提示した上で西鶴の構想を探り、その仕掛けを読み解いてきた。本話がいかに中世説話を越えた、俳諧性の濃い西鶴独自の咄になっているか、その一端は明らかにできたのではないかと思う。

第二節では、bに描かれた竜の昇天話が仏教(禅宗系の説教)と結び付いた珍しい咄であったことや、dの「二間四方の連の葉とその上で涼む人」は太乙真人蓮葉図をパロディ化したものであることを明らかにした。第三節では、これらの素材が結び付き、一つの咄として成立していく構想の側面を追求した。着想の核となつたと考えられるものとして、(イ) 策彦と蓮葉図との結び付き、(ロ) 吉野の土地設定と策彦、の二項目を立てて、本話の骨格をなすbとdの挿話のつながりを検証し、西鶴の構想に迫った。更に第四節では「策彦の涙と信長の笑い」の意味に焦点を当てることを通じて西鶴の作為を解明し、本話の本質的性格を探った。

以上のことを通して、本話は、策彦に縁のある「明・信長・公案・禅宗・天龍寺・後醍醐帝」等々を出発点として、新たな話材とそれぞれを繋ぐ着想とを得、同時にウソ咄・ナゾ咄に持つていく作為を取り込んだ上で、大枠として独立性のある挿話を連ねる咄の形式を利用することによって一編となしたものであることが、ほぼ明らかになつたと考える。

挿話を連ねるといふ点に今少し説明を加えておく。西鶴は挿話を連ねる際に、横並びに策彦のエピソードを連ねる形をとらない。むしろ一見別々の独立した挿話を並べてみせ、思いがけない配列を作り上げているのである。確かにそれは一見したところ法話の枠、古老に咄を聞く形式等によりかかった形に見える。また人物も(西行)——道心者——策彦と、あたかも「名僧」という小見出しに導かれた、名僧列伝のような形式に見える。更に業比べの形式によって咄は展開していく。私はこれらの枠組みを、咄があらぬ方向に逸脱

するのを防ぐための、或いは一つの咄として完結させるための「セーフティネット」という視点で捉えようと思うのだが、それはあくまで表面に現れた形であつて、西鶴の構想・作為・仕掛けはこれとは別に考えねばならない。

即ちこうした形式上のスタイルはあくまで西鶴が利用している外見にすぎず、本話はより本質的には、西鶴の俳諧師としての力を遺憾なく発揮した謎、掛けや作為に満ちた咄なのである。その中で西鶴は、構想の骨組みや作為の本質にかかわる言葉を、決して咄の表面に示さない。例えば、「後醍醐帝・天龍寺・拈華微笑・破顔微笑・公案・禅宗」などがこれにあたる。それらを示唆するヒントは「吉野・嵯峨・りやうじゆせん・笑い・涙」など、見落としそうな所にさりげなく配されているのである。こうした本話のナゾ話としての側面を見落としてはなるまい。「諸国はなし」の三五話のうち、いくつかにはこうした西鶴の謎掛けに満ちた咄が含まれているようである。

注

- 1 江本裕「西鶴諸国はなし——説話的発想について」近世文芸8号、昭和三十七年11月。
- 2 富士昭雄「西鶴諸国はなし・懐硯」(対訳西鶴全集5) 昭和五〇年8月、明治書院。
- 3 竜の昇天咄は、中国にその源が求められようが、周知のごとく民話・縁起・一代記・謡曲・説話等類話には事欠かない。多くは夕立・雷・雲・池水等とセットになつて流布している。一つ一つ例示するまでもなからう。
- 4 近世文学資料類従 古俳諧編31、一九七五年4月、勉誠社、一五九頁。
- 5 仮名草子集成第二十一巻(一九九八年3月、東京堂出版) 収載の写本校本による。以下『奇異雑談集』の引用は同書による。
- 6 『西鶴諸国はなし』と『奇異雑談集』との共通素材は、既に指摘されているように巻四の「鯉の散らし紋」にもみられる。禅宗系の法話、或いは写本を媒介として、両者の間に何らかの繋がりがあると考えられそうである。
- 7 『雲根志』後編巻之二 生動類三(一九六九年11月、築地書館、二三五〜二三六頁)。

- 8 前掲(注7)書、卷之二 生動類十、二四三頁。
- 9 『古文真宝諺解大成』(漢籍国字解全書十一卷、明治四四年11月、早稲田大学出版部、二四三〜二四四頁)。
- 10 管見の範囲では、絵手本や画題の類に見当たらない。
- 11 太乙については荀子以来漢代にかけて文献上の記載が見られるが、何れも形而上的な色彩が強い。こうした太乙の神としての概念が西鶴の念頭にあったとは考えにくい。
- 12 定本西鶴全集第十卷、一九七五年2月、中央公論社、二八九頁。
- 13 拙稿『西鶴諸国はなし綜覧——成立論・方法論への手掛かりとして——』(北星学園大学文学部北星論集35、平成十年3月)四節表6において、『西鶴諸国はなし』全三五話にわたって話材の並列性の度合いを表示し若干の解説を加えた。
- 14 例えば、『宗祇諸国物語』を例に取ると、同じ吉野を舞台にしている巻二「高野登五障雲」では当然のことながら話材自体が吉野を一步も出ない。咄本や仮名草子類とは異なる西鶴独自の方法と言えよう。
- 15 前掲(注13)論文二節において、『西鶴諸国はなし』全三五話にわたって小見出しの持つ意味について論じ、必ずしも主題を意味する訳ではないこと、フレキシブルに考えるべきであることを指摘した。
- 16 大きさを「何畳敷」と表現する例は談林俳諧に普通に見られる。
- 17 牧田諦亮著、一九五九年3月、法蔵館。
- 18 平成二年4月、町田市立国際版画美術館、七二頁。
- 19 前掲(注17)書。
- 20 日本古典文学大系35、一九八六年6月、岩波書店、四一三頁。
- 21 関牧翁「天龍寺の歴史と禪」(『古寺巡礼 京都4 天龍寺』一九七六年、淡交社、七八頁)。他。
- 22 水上勉氏は、「天龍寺の名には格別の語感があると思う。等持院で聞いた先輩の話だと、龍は禪の護神だということである。」として、この寺のイメージを天に向かって登る龍と重ねあわせている。(『天龍寺幻想』前掲(注21)書、六八〜七一頁)。
- 23 日本古典文学全集39、『井原西鶴集二』一九七六年7月、小学館。

- 24 前掲(注2)書。
- 25 「作品解題」『西鶴事典』、平成八年12月、おうふう、一八八頁。
- 26 新日本古典文学大系76、『好色二代男 西鶴諸国はなし 本朝二十不孝』一九九一年10月、岩波書店。
- 27 「はなす」ことへの凝視——『西鶴諸国はなし』の「はなし」と「はなし手」愛知教育大学研究報告46、一九九七年3月。
- 28 『芭蕉紀行文集』、一九七一年11月、岩波書店、一六頁。
- 29 苔清水が歌枕・付合・地誌類に見えるのは、管見の範囲では『吉野山独案内』が最も早く、『和州旧跡幽考』以降次第に定着し、貞享期以降になると吉野の名所として急速に俳書にも多出するようになったと感じられる。苔清水再発見の時期と言えようか。
- 30 前掲(注20)書、巻二十四「依山門 嗽訴公郷僉議事」、四二八頁。
- 31 『近世文学資料類従 狂歌編1』勉誠社、二八八頁。
- 32 形式や枠組みをセーフティネットとして捉える視点は、他の作品においても有効であると考えるが、この点については別の機会に論じたい。

北星学園大学文学部 北星論集第36号 正誤表

頁・行目	誤	正
44頁17行目	誰れ彼れ	だれかれ
51頁17行目	頭惱	頭腦
67頁16行目	[参考文献] テンニエス『ゲマインシャフ… 念—上・下』岩波書店… 大阪市立大学経済研究所…	[参考文献] テンニエス『ゲマインシャフ… 念—上・下』岩波書店… 大阪市立大学経済研究所編…
159頁(v)13行目	蓮葉図	蓮舟図
158頁(v) 1 行目		
150頁(v) 4 行目	天竜寺	天龍寺